
IS学園に来た最狂の男

ゼニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS学園に來た最狂の男

【コード】

N8839U

【作者名】

ゼニア

【あらすじ】

ただ物語にあの人が加わっただけ、そう、加わっただけ。

プロローグ

ここはIS学園。

アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校である。

操縦者に限らず専門のメカニックなど、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成される。

その学園に今、最狂の男が現れた……

「み、皆さん、き、今日は転校生を紹介しますよ」

このクラスの副担任、【山田 真耶】が何かに怯えながら喋る。

（何で、怯えてるんだ？）

山田先生の状態を見てISを扱える唯一の男、【織斑一夏】が疑問に思う。

「転校生だって」

「珍しいね、この時期に」

しかし、その事に気づかず、ざわめくクラス。

「で、では入って来ててくださいい」

瞬間。

クラスに底知れぬ重圧が広がった。

教室の扉から入って来たのは、男。

それも筋骨隆々の。

青く長いロン毛、視線を向けただけで相手を射殺せそうな鋭い眼光。

その男の風貌は完全に裏の人間のソレだった。

「ひい……」

あ、あの、えつと、じ、自己紹介をお、お願いしますう……」

半泣き、と言うかもう泣いている山田先生の言葉で男が口を開き……

「バーババ バーババ バーバババ……」

バルバトス・ゲイティア。

貴様らのクラスメイトになる男だぶるああああ……！」

ふざけてるのかそうでないのかよく分からない名乗りを上げた……

第1話 最狂の男（前書き）

Qこの小説はどんな小説ですか？

Aバルバトスがキャラクター達を恐怖で支配するハートフルコメディーです

ごめん冗談？

第1話 最狂の男

「」「」……………」

クラスは沈黙に支配されていた。

女子達は全員満場一致でこう思っていた。

(これはない)

何故そう思うのか。

一夏に続いて二人目の男がこんなだからか。

それともバルバトスの着ている服がまさかのIS学園の一夏も着ている制服だからか、しかも筋肉のせいで超ピチピチである。

ちなみに山田先生のように半泣きの女子が多数いる。

「な、何なのあれ」

「織斑くんが続いて二人目の男のIS操縦者らしいけど……………」

「全然テンション上がらない！」

「ていうか、凄く怖い！」

「え？ ち、ちょっと待ってよ！ あたしの後ろの席が空いてる！？
そんな……嘘……」

だんだんと女子達がざわめき出す。

「ぶるあ……」

当のバルバトスはクラスメイト一人一人を見渡していた。

この時点で失神者多数。

ちよつと前まで唯一の男だった一夏も机に頭を置き、現実逃避している。

そんな生徒達を見て、ここでやっと一人の人物が口を開く。

「お前ら、静かにしろ」

一夏の姉であり担任の【織斑 千冬】である。

「ゲーティア、お前の席はあそこだ、さっさと着け」

バルバトスを恐れる事もせず、驚くほど何時も通りに言葉を発する。

「貴様あ……」

しかし、バルバトスは動かず、千冬を睨み付ける。

「何だ」

千冬も負けず、バルバトスを睨み返している。

しばらく睨み合いが続き（生徒達はこの睨み合いが一、二時間続いたように錯覚した、と後に語る。）

「中々見所のある奴だ」

バルバトスが口を開きそう言った。

そして、自分の席へと歩いて行く。

「ふっ……」

千冬は何気に満更でもない顔をしていた……

そして、一夏は改めて姉の凄さが分かった瞬間だった。

.....

場所、アリーナ

バルバトスVSセシリア

「.....」

「.....」

.....

「よし、始める」

「どういう事ですのおおおおお！？」

セシリアは自分の置かれた状況を把握出来ていなかった。

何故自分はISを身に纏いここにいるのか。

何故転校生、バルバトスと対峙しているのか。

そもそも、今は飛行訓練をする授業ではなかったか。

「どういう事も何も、お前達もゲーティアの強さを知っておけばいいと思つてな」

千冬は淡々と言葉を告げる。

「思つてなじや、ありませんわ！！」

何故わたくしのですの！？」

「お前は専用機持ちだろう」

「一夏さんだつて持っていますわよ！？」

「何か？ 貴様は私の一夏が怪我してもいいと言つのか？」

「怪我する事前提！？」

一瞬さりげなくブライコンを全開させた千冬を気づく者はいなかった。

さらに問答を続ける二人を見てバルバトスがイラついたようにセシリアに喋りかける

「貴様あ、長々と何をしている？」

鼠のように逃げおおせるか、この場で死ぬか、どちらか選べい！！」

「ひっ！

そ、そんな……

究極の二択だなんて……」

セシリアは考える、正直逃げたい、だが自身のプライドがそれを拒んでいる。

しかし、だからと言って死にたくもない

どうする……

どうする、セシリア・オルコット

「あ、あなた、ISどうしたのですか？」

答えが出なかったので時間稼ぎにバルバトスに話かける。

そう、バルバトスは何も身に着けず立っているのだ。

「俺にあのような鉄クズなぞ必要ぬえい！」

じゃあ何でここにいるんだよ、と話を聞く誰もが思った（千冬は除く）が言葉には出さない、恐いから。

「さあ、無駄話は終わりだあ……」

その瞬間、バルバトスから凄まじいオーラが溢れ出る。

「ぶるあああああー!!」

そして、雄叫びのような声と同時にバルバトスが光に包まれる。

「あ、ああ……」

その光が収まると、バルバトスの服装が変わっていた。

全身群青色のタイトのようなスーツに腰巻き、そして背にはマントがついていた。

だが群を抜いて異質なのはその手に持つモノ

禍々しい形状をした斧だった。

啞然。 呆然。 愕然。

皆、一様に声が出せなかった。

千冬を除いて。

千冬は腕を組ながら何か頷いていた。

あんた何者だよ。

一番ひどいのはセシリアである、バルバトスの闘気を真っ向から受けているのだ、気絶しないだけセシリアは凄い。

「あ……あ……」

も、もう、もうどうにでもなれですわ！」

半ばヤケクソになりながらスターライトmk?を展開しバルバトスに撃ち込む。

放たれたレーザーは真っ直ぐにバルバトスへと迫る、が

「ぬうん!!」

バルバトスは迫り来るレーザーに斧を振り下ろしかき消した。

「え………?」

驚愕で目を丸くするセシリア。

「ぬっつ……」

この程度かあ………」

バルバトスはつまらなそうに呆れたように言う。

「ま、まだ、まだですわ………」

もう完全に戦意喪失しているのが分かる程の顔色をしているが英国淑女のプライドか、蚊の鳴くような声で答える。

（あ、わたくし、死n……………）

セシリアの意識はここで途切れた。

第2話 鋼体（前書き）

のほほんさんとの絡みはいらなかったかも……
何か無理やり感が……

第2話 鋼体

「うふふふ……」

不思議な笑いをあげる女が一人。

その名はセシリア・オルコット

バルバトスの圧倒的パワーに敗北した第1人目である。

ちなみにバルバトスには常識もあるようで、セシリアに放った最後の一撃は手加減されていたようで、美味しいこと絶対防御だけを一瞬で消滅させる事だけに止まった。

「せ、セシリア？」

なんとなくおかしなセシリアを心配し、一夏が声をかける。

「あら、一夏さん

どうかなさいまして？」

一夏の方へ振り向き、お淑やかに返答する。

ただし瞳のハイライトはないが。

「あ、ええと、大丈夫か？」

明らかにおかしいセシリアに冷や汗を流しながらも聞く。

「ふうん、みんな怖がつてるよお？」

バルバトスに恐れる所かバルバトスをバルバルというあだ名で呼ぶこの少女の名は【布仏 本音】 通称のほほんさんである。

天然がなせるパワーなのか千冬に続き二人目のバルバトスを恐れない人間であった。

「貴様あ……………」

何故俺をあだ名で呼ぶ？」

「ええ？ 格好いいでしょ？ バルバルー。」

バルバトスの睨みに全く動じず笑顔を向けのほほんと話す。

「ふん……………」

貴様、名はなんと言う？」

「布仏 本音だよー」

「あの女に続き貴様も中々見所があるな……………」

バルバトスはそう呟いた。

『嘘、のほほんさん凄……………』 ひそひそ

『全く怖がりもしないなんて……………！』

『私、あの子に弟子入りしてくる!』

『私も!』

『私も私も!』

などと言う会話をしている女子がいたとか何とか。

「織斑」

千冬が一夏に話かける。

「ん？ 千冬ね、じゃなくて織斑先生、なんですか？
今、セシリアを正気に戻すのに忙しいんだけど」

うふふふと笑い続けるセシリアをガクガク揺らしながら一夏は答える。

「なに、すぐに済む話だ」

織斑、お前ゲーティアと模擬戦をしろ」

「なん………だと?」

雷に撃たれたかのような衝撃を受ける一夏。

「ゲーティアと模擬戦をすれば今よりも数段強くなれる」

「あんなのを、あんなのを俺にも受けろって言うのか………!」

一夏は汗を滝のように流しながら拳を握りしめる。

「き、危険すぎます！」

すると、いつの間にかやって来た一夏の幼馴染み【篠ノ乃 篤】が口を挟む。

「大丈夫だ、オルコットを見る。
傷一つないだろう」

「傷よりも深刻な状態な気がしますが!？」

やはり淡々と話す千冬。

それにツッコむ篤。

「織斑先生は、千冬姉は俺がセシリアみたいになってもいいって言うのか!？」

一夏が青い顔で涙目になりながら千冬に問う。

相手がバルバトスならきつと誰でも構うなるだろう。

「大丈夫だ、お前は私の弟だぞ？」

千冬が一夏を撫でながら優しい声で言う。

「千冬姉……」

「それに私はアレに耐えた」

「そうか、耐え……」

ええええええ！！！！？ 千冬姉アレ耐えたの！？」

「私に出来てお前に出来ないはずがない」

「いや無理！ 絶対無理！ ていうか千冬姉、本当に何者！？」

俺の姉がこんなに凄いわげがない、と頭を抱える一夏。

しかし、実際お前の姉はこんなに凄いのだ。

「よし、では逝くぞ一夏」

「字が違う！

あ！待つ、助けてくれ箒いいいいいい………」

千冬に担がれながら連れて行かれる一夏

自分に助けを求めるそんな一夏を箒はどうする事も出来なかった……

場所、アリーナ

バルバトスVS一夏

「クソっ、拒否したのに、拒絶したのに！

何か変な力が働いて気が付いたらいつの間にか白式を展開してアリーナに立つちまっていた……！」

「貴様が次の相手かあ………」

一夏が世界に絶望しているのを見ながら構えをとるバルバトス
今回はもうすでに戦闘服を装着している。

「もう、いいさ、諦めた。」

俺も男だ！ 負ける事前提でも一撃は入れてやる！」

そう言い、雪片を構える。

「よし、二人とも準備はいいな、始める」

千冬の声が響き戦闘が開始された。

「うおおおおお！！！！」

まず動いたのは一夏、一直線にバルバトスへと向かい、雪片を振り下ろした！

キンッ

「……………え？」

しばし呆然とする。

雪片は確実にバルバトスに当たった、当たったが弾かれた。

（何だコレ、何だコレエエエ！？）

硬っ！ すげえ硬い！

本当に人間か！？）

「これで終わりかあ………?」

バルバトスは一夏を見上げ問う。

「ま、まだだ!

う、うおおおおお!!!!!!」

雪片を縦横無尽に振るいバルバトスに攻撃する、が。

キン! キキン! キンキンキンキン!!

全てが弾かれて終わった。

「貴様に………」

一夏の攻撃が終わりバルバトスが口を開く。

「貴様に俺と闘う資格はねえ!!」

バルバトスの口から出たのは怒号だった。

(あ、無理だな)

バルバトスの言葉を聞いて一夏は諦めた。

そして次の瞬間、バルバトスの斧から炎が溢れだし

「死ぬかあ!!」

一夏を斬りつけ、次に斧は風を纏い

「消えるかぁ！！！！」

一夏を上空に斬り上げ

「土下座してでも生き延びるのかぁ！！！！！！」

上空に上がった一夏を掴み膝蹴りをいれ、地面へ叩きつけた。

そして最後に斧から光が溢れ

「微塵に碎けるおおお！！！！！！」

極太光線が発射された。

バルバトスの餌食、二人目

第3話 漢に後退の二文字は……（前書き）

今回はバルバトス無双はなし。

第3話 漢に後退の二文字は……

『貴様ら、こんな所で長々と何をしている？』

鼠ように逃げおおせるか、この場で死ぬか、どちらか選べい！！』

『さらせえい！！ 術なんぞ使ってんじゃぬえい！！』

『抜かせい！！ 後退の二文字はぬえい！！』

『選べい！！』

『来いよお……』

『くたばりやがれ！』

『ぶるああ！！』

『まとめて殺してやる、だんざあああい！！！！！！』

『うわああああ！！！！！！』

一夏はベットから跳ね起きる。

「はあ……はあ……」

ゆ、夢か……」

.....

あれから、バルバトスの凶悪コンボを受けた一夏は一時間ほど立ってから保健室で目を覚ました、そしてセシリアと同じ状態に陥って

おり。

『あははははは』

と渴いた笑いを延々としていた。

やはり瞳にハイライトがなかった。

それはもうみんな心配した

途中でのほほんさんがセシリアを連れて来て一夏の隣に座らせ、『あははははは』『うふふふふふ』と笑う二人を眺めて、『大変だねえ』とコメントしていた。

そこへ丁度やって来た千冬が取り敢えず、のほほんさんを叱り、一夏を見据え

『何をしている、さっさと正気に戻れ』

と、出席簿で一夏の頭を叩きつけた。

『ハッ！？俺は一体何を！？』

すると不思議なことにおかしくなっていた一夏が正気に戻り、瞳のハイライトも戻っていた。

織斑千冬、本当に何者か分からない女であった。

朝から悪夢を見てネガティブな状態で教室へ入り席へ着いた一夏の

耳に入ったのは転校生の話。

何でも2組に中国から転校生がくるらしい。

みんなキヤイキヤイと話している。

バルバトスがないから。

バルバトスはまだ教室に来ていない、だからこそこんな時だけは楽しく喋りたい。

ていうか何で真面目に教室に来るのか、IS乗らないのにISの授業を受けてどうするんだよ、と。

てかそもそも、あの光線とかは一体何なんだ……

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」
話を聞いたセシリアがやって来る。

おお、セシリア治ったのか

「うふふ」

ハイライトはないままだった……

千冬姉……なんでセシリアは治して上げなかったんだよ……

「どづかなさいまして？ 一夏さん」

しかし、着実と元に戻りつつあるセシリアだった。

話は進み、クラス対抗戦は頑張り一夏！というような話になり、一夏はふと思う。

「クラス代表……バルバトスでいいんじゃない？」「ダメ！」「え？」

一人の女子が口を挟む。

「ダメよ！ クラス代表まであんなのになったら色々とまずい事になるよ！！」

その顔は必死そのものだった。

そんなに嫌か。

いや、嫌か。

「でもほら、専用機を持つてるのは今の所、一組と四組だけだから織斑くんでも大丈夫だよ！」

別の女子がそう言った瞬間

「……その情報、古いよ」

クラスの入り口から声が響く。

そこには髪をツインテールにした如何にもツンデレそうな女の子が

立っていた。

「二組も専用機持ちが代表になったの、そう簡単には優勝できないから」

そう言った人物を見て一夏は驚く。

「鈴？ お前鈴か？」

「そうよ、中国代表候補生、【鳳 鈴音】 今日には宣戦布告に来たつてわけ」

ふっと小さく笑みを漏らす

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ……！ 何てこと言つつのよ、アンタは！」

一夏にからかわれ動揺する鈴。

・・・そして、奴がやって来る・・・

「おい」

「なによ……っ！？」

後ろから声をかけられ、それを声を荒げながら振り向く鈴、その顔が驚愕に染まる。

「邪魔だぁ」

そう、歩くチート、バルバトスが立っていた。

バルバトスの言葉に冷や汗を流しながら後退りし、道を開ける鈴。

鈴が男だったら、この時点でアウトだったろう。

そんな鈴をバルバトスはチラリと見て、興味を無くしたかのように席へと歩いて行った。

「だ、大丈夫か？ 鈴」

一夏が心配し、声をかける

「な、なによ、アレ……」

「バルバトス・ゲイティアって言って二番目の男のIS操縦者らしい、ISに乗らねえけど」

「あ、アレが……」

信じられないといった表情でバルバトスを見る鈴。

「ま、まあ、取り敢えず、今は教室に戻れよ」

「え、ええ、そうね

また、来るわ……」

そう言い、鈴は自分の教室へと歩いて行った。

- - - - -

授業が終わり、学食へと向かった一夏達。

そこで見たものは……！

「ベリーメロオン……！」

何故かメロンを恐ろしい速度で食べているバルバトスだった。

「何だ、アレは」

「もはやツツコミきれなくなってきた……」

頑張れ、一夏達。

第4話 一夏強化計画(前書き)

バルバトス「回れロンドで俺をハメ殺している奴、ゆるさんぞお！」

第4話 一夏強化計画

皆、思った事は無いだろっか……

バルバトスは一体どこで生活しているのか、と。

バルバトス（32）はアレでも一応、学生なので寮に住んでいます。

ちなみに相部屋

誰と住んでるかって？

のほほんさんと決まってるじゃないか。

最初は同じ男だからと一夏と相部屋にさせる気だったようだが、一夏が泣いて拒んだため、バルバトスを全く怖がらないのほほんさんと決まったという。

バルバトスのベッドの横にはディアボリックファンクを手入れするのに必要な道具がいっぱいあるらしい。

- - - - -

あれからなんやかんやあって一夏が鈴にひっぱたかれた。

バルバトスとしてはそんなに重要じゃないので割愛。

そして、バルバトスは今何をしているかというところ……

場所、アリーナ

バルバトスVS一夏

「どづして……どづしてこづなつた」

頭を抱える一夏

何故再び一夏が悪夢を見かけてるのかというと、千冬の粹な計らい（千冬にとっては）によるものだった。

そう、もうすぐクラス対抗戦、それに備えて千冬がバルバトスに一夏を鍛えてくれと頼んだのだった。

そしてその頼みに何を思っつか承諾したバルバトスは一夏を連れてアリーナにやって来たというわけである。

「今から貴様に地獄を見せてやるよお………」

「鍛えてくれるんじゃないのか!?!」

「実戦で強くなれい!?!」

「何でそんなピッコロさんみたい、なつ!?!」

「そうです！　なぜあの者に特訓など任せたのですか！」

セシリアに続き箒も千冬に対し声を荒げる。

『それで攻撃のつもりか！』

「大丈夫だ、心配するな」

千冬は二人の戦い（と言ってもバルバトスが一方的に攻撃している）

『灼熱のお……』

バアンストライクウー！！』

「しかし……！！」

尚も食い下がる箒。

そんな箒をみて千冬は「はあ」と溜め息を吐き

「奴はあれでも手加減をしている

一夏が死ぬ事はないさ『死ぬ』事はな……」

と言った。

何気に不穏な事を言っているが。

『零落、百夜あああ……！！』

『ほう、楽しませてくれるんだろうなあ？』

「ほ、本当に大丈夫なんですの……？？」

- - - - -

「うおおおおお！！！！！！」

零落百夜を発動させた一夏がバルバトスへ突っ込む。

「ぬうん！！！！」

それをバルバトスは斧で受ける。

「おおおおお！！！！」

「ぶうるああああ！！！！」

一瞬の拮抗。

「！！！！ぐあっ！！！！」

打ち勝ったのはバルバトス。

一夏の雪片を弾き返した。

「く、しまった……………」

弾かれた衝撃で雪片を取り落としてしまう。

「終わりだあ……………」

バルバトスがゆっくりと歩いて来る。

第5話 トランブル(前書き)

サブタイが思い浮かばない

千冬はもしかしたらサイヤ人かもしれない(え

第5話 トランプル

「死ぬまで寝てるお!!」

「ぐあ……!!」

バルバトスによって地面へと叩きつけられる一夏

あれからずっと一夏はバルバトスと特訓（と言う名の拷問）している、師匠の修行から逃げるケ イチの如く何度もエスケープを試みた一夏であったがそのたびに千冬やバルバトスが先回りしており諦めざるを得なかった。

ちなみにバルバトスと戦い敗北するともれなくついて来る症状は千冬が再び治していた。

「何時まで寝てんだ!」

何故か雷を伴う踏みつけをくらう一夏。

「くっ! 寝てるって言ったのにどっちだよ……!!」

ちなみに一夏をひっぱいた女、鈴は一夏が特訓をしているのを知っているが見に来ていない。

まだ怒っているのだ。

一夏が謝るまでゆるさんと思っっているようだが正直謝りに

行けない

何故ならバルバトスが特訓と称して授業中でさえも一夏にピンポイントで殺気を送り続けているのだ、もちろん休み時間でも、どうやっても謝りに行けるような状態じゃなかった。

といつても一夏は女の子に「ほつといて」と言われたら本当にほおっておくタイプなのでこんな状態じゃなくとも謝りに行ってはいないだろうが……

「つまらん、つまらんぞお!!」

それが貴様の本気かあ!!」

「俺だって全力なんだよ!

本当に人間かアンタ!？」

と、言いつつもバルバトスの攻撃を防ぎきっている一夏は十分強くなつたと言える。

しかしコレはバルバトスが本気を出していないからであり、本気を出したら攻撃を防いだ瞬間にカウンターを叩き込まれたり、戦う資格はない、と凶悪な極太レーザーを何発も撃ってきたり、バルバトスを中心に広範囲に渡りどのようなモノであつても一撃で死滅させる事の出来るもう何かよく分からない技を使ってくる。

とんだ鬼畜である。

そしてバルバトスにとってIS特有の絶対防御でさえ防いだ事にな

るようで正直ISを使う方達にとっては本当にバルバトスと相性が悪い。

とつかバルバトスが規格外すぎるだけである。

イグニッションブースト
「瞬時加速！」

一夏が瞬時加速を発動させバルバトスの“背後”へ回る。

「くられ！」

そして雪片を振り降ろすが……

「俺の背後に立つんじゃないぞ！」

バルバトスはそう叫ぶと雪片を振り下ろす腕を掴みそのまま前方へ投げ飛ばした。

「うわっ!?!」

「そのまま果てる!!」

バルバトスの斧から赤い光線が幾つもの発射され、投げ飛ばされ空を舞う一夏へと殺到する。

「うわああああ!!」

ズドドドドドドド!!!!!!

光線は追尾性能も兼ね備えていた……

K・O・
バルバトスWIN!

「一夏もなかなか頑張るな」

「いえ、まあ頑張らざるを得ないと言っか……」
一夏を見守るは千冬と山田先生。

特訓を始めてから千冬は毎日二人を見ている。

仕事はどうした。

山田先生は観戦する千冬にいい加減仕事に戻るよう言いに来たが千冬になんやかんや言いくるめられて一緒に観戦している。

「それにしても凄いですね織斑くん」

「まあ、何度も死ぬような思いをすれば嫌でもアレくらいにはなる
だろう」

だが、まだまだだな」

千冬は一夏を厳しく評価する。

だがその顔は少し綻んでいた。

「ほえー　バルバルは相変わらず強いねえ」

「何で……?」

アリーナ観客席にて、のほほんさんが感心し、隣に座る【谷本癒子】がそつと呟く。

「んー?」

のほほんさんが頭に?を浮かべながら首を傾げる。

「何で生身でISと戦えるの!？」

しかも圧倒的優位で!！」

叫ぶ癒子さん

まあ無理はないだろう。

「んー、バルバルに常識は通用しないんじゃないの?」

とのほほんさん。

どこのメルヘン第二位だ。

「私はあの一人のせいでのせいで今までの常識が覆されそうだよ……」

(バルバルってきつと楯無お嬢様より強いよねえ?)

頭を抱えている癒子さんを後目にふと考えるのほほんさん。

ISでバルバトスを倒す者はいるのか、というかあのカウンターを

耐えられる者が千冬の他にいいのかも怪しい。

何度も言うが本気で千冬は何者なんだろう。

第6話 一夏強化（前書き）

【アンケート的な何か】

皆さんはバルバトスがISを装着し戦う所をみたいですか？

？見たい！

？ISなど使ってんじゃねえ！

？のほほんさんペロペロ

気が向いたら答えてみて下さい。

第6話 一夏強化

試合当日、第二アリーナ

第一試合

一夏VS鈴

バルバトスの特訓（と言う名の一方的なボコリ劇）を終え、色んな意味で心身共に強くなった一夏の初戦闘。

噂の新生生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員御礼。

通路で立ち見する生徒さえいる。

一夏と鈴はアリーナ中央で試合開始を待つ。

鈴のISは【甲龍】

こつりゅうではなくしえんろんである。

だからと言って願いを叶えてくれたりはしないし、「足下がお留守ですよ」と脚払いを仕掛けたりもしない。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、一夏と鈴は空中で向かい合う

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「そんなのいらねえよ
全力で来い」

(それにあの特訓に比べたら痛めつけられるレベルがMAXでも俺耐えられるんじゃないか……?)

バルバトスとの特訓を思いだし僅かに身震いする一夏。

「ふうん、一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。」

シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

つまり『殺さない程度にいたぶることは可能』と言う事。

正直、もしかしたら死ぬかもレベルに痛めつけられていた一夏にとつては、何て優しいんだ、鈴！な感じである。

『それでは両者、試合を開始してください』

アナウンスにより試合が開始された。

ガキンー！！

両者が同時に動き、一夏の雪片と鈴の青龍刀の形をした双天牙月がぶつかり合う。

「あら、やるじゃない
初撃を防ぐなんてさ
けど、これはどう!?!」

鈴は双天牙月グルグルと振り回し縦横無尽に斬り込んでくる。

「うおおおおお!!
このくらい!!」

一夏が叫び、様々な角度からの斬撃を雪片でことごとく弾く。

「っ!?!」

へえ、本当にやるわね
ちよつと甘く見てたわ

「へっ、このくらいバルバトスの攻撃に比べたら楽勝だぜ」

鈴が驚き、一夏が笑みを浮かべる。

「言っわね……」

じゃあコレはどうかしら!?!」

パカッと鈴の肩アーマーがスライドして開き、中心の球体が光った瞬間、一夏が地表へと打ちつけられた。

「くっ、何だ今の？」

何も見えなかった……」

……

「ほっ……」

二人の戦いを眺めていたバルバトスがニヤリと笑う。

そう、二人から視線を外し空を見上げて。

「何だあれは？」

その数メートル離れた場所で箒が眩く。

「【衝撃砲】ですわね、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲撃化して撃ち出す。

ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

その眩きにセシリアが答える。

が、箒は一夏を心配し、耳には入っていないようだった。

そしてバルバトスは一夏と鈴から視線を完全に外し、ピットから出て行った……

- - - - -

(多分今のは目に見えない衝撃波みたいなモノなんだろうな
同じようなのをくらった事あるし……)

そう一夏は考え、空へと飛び上がる。

「よし！ 本気で行くからな！ 鈴！」

そう、鈴へと叫ぶ。

「そんなのあたり前じゃない！
返り討ちにしてあげるわよ！」

双天牙月を構える鈴との距離を詰めようと一夏がイグニッションブースト瞬時加速を使用する
ため加速姿勢を取る。

そして……

試合の終わりが訪れる……

ズドオオオオオオン！！

「！？ 何だ！？」

大きな衝撃がアリーナに響く。

アリーナ中央から煙が上がり、“何か”がいた。
今はこの“何か”がアリーナの遮断シールドを破り入って来た衝
撃だったようだ。

「何が起こってるんだ……？」

まあ、もしかしたバルバトスの本能ではなく、作者の意志かも知れないが。

「織斑一夏あ、貴様の出番は終わりだあ……
後は俺がやる」

ちなみにバルバトスの言葉は「お前らは休んでな、後は俺がやってやるよ」的な爽やかな意味ではなく、「いい加減俺も戦いてえ！」的な意味である。

「い、いや、でも……」
一夏が正直任せてもいいか？ いやでも……みたいな葛藤の中言葉を
を出す

『ゲーティアの言う通りだ、そこは任せてみる』

千冬の言葉で一夏は完全にバルバトスに任せるという結論を出
した。

「行くぞ、鈴！ こんな所にいたら巻き添えくっちまう！」

「え？ あ、う、うん」

未だに状況をイマイチ理解出来ない鈴を連れ一夏が安全地帯
で移動する。

それを見て異形ISが一夏に攻撃を仕掛けようとするが、バルバト

スにより一瞬でアリーナの壁まで吹っ飛び激突する。

「貴様の相手はあ……
俺だあ！！！」

そしてバルバトスが斧を異形ISへと向け、極太光線を発射する。

そう、チープエリミネイトと言う、当たったら洒落にならない攻撃である。

バルバトスから放たれた光線を異形ISは空へと飛びかわす。

そして上空からバルバトスへ向けて無数の光線を発射する。

「ぬうん！！！」

光線を斧で振り払う。

「余裕かましてんじゃねえ！！！」

斧から完全追尾の赤い光線を多数発射する。

その全てが殺到し、異形ISはシールドにより防御体制に入る。

「縮こまってんじゃねえ！！！」

シールド展開を見たバルバトスが異形ISへと炎を纏った隕石のよいなものを落とす。

それは問答無用でシールドを貫き異形ISを地面へと叩き落とした。

そんなんで終わるバルバトスではなく、異形ISが落ちた所へ一瞬で近づき

「今死ね！」

斧を振り下ろし。

「すぐ死ね!!！」

踏みつけ。

「骨まで碎けるお!!!!！」

再び壁まで吹き飛ばした。

もう、フルボッコである。

「ふん、つまらんなあ……
もういい、終わりだあ」

異形IS退場のお知らせ。

バルバトスが斧を構え力を溜める。

「一発で仕留めてやるよお……」

見ただけで分かっってしまうような凄まじいエネルギーを溜め、そして

今更だし正直必要ないかもしれないけどバルバトス紹介

【バルバトス・ゲーティア】

この小説の主人公。

むしろTOD2 リメDの裏の主人公。

というか、バルバトスの出るゲームは全てバルバトスが主人公かもしれない。

理不尽の権化のような存在であり、相手が弱いと理不尽にキレる。

テイルズオブシリーズではかなり特異な存在。

カウンターが豊富で、アイテムを使う、後退する、ガードする、術を使う、バルバトスの背後に回る、などをするとビツクリするくらいカウンターを放ってくる。

その内、「俺に触れるじゃねえ!」とか「息すんじゃねえ!」とか「生きてんじゃねえ!」とか本気で理不尽なカウンターが増えるかもしれない。

難易度が最弱だと最強になる。

ステータスが10倍になったり即死技を何回も撃ってくる。

なんという理不尽。

「術に頼るか屑どもが！」とカウンターを放つがそのカウンターが術である。

英雄相手だと理不尽に強くなる。

外を散歩していると野生のバルバトスが飛び出してきて理不尽な強さを見せつけてくる。

この小説ではISが使える設定ではあるが未だに使っていない。

というかわけなくても強い。

テイルズ世界がでたらめなのか、バルバトスがでたらめなのかよくわからない。

そもそもバルバトスが何故ISの世界にいるのか甚だ疑問である。

第7話 転校生……？ぶるああああ！！（前書き）

アンケート結果

皆もの見事に？を誰も選ばなかったですね

？が4票

？が……………6票

信じてたのに！ 皆の事を信じてたのにっ！

皆どんだけのほほんさんをペロペロしたいんだよっ！！

変態紳士だらけかつ！

まあ僕もだけど！

さあて、うん、バルバトスがISを使わないってのは決まったが、
のほほんさんペロペロかあ……

ま、まあバルバトスがやらなきゃいけないわけじゃないし、あれだね
バルバトスに敗北して何かおかしくなったキャラがのほほんさんを
ペロペロしたりするのでいいよね（あ

第7話 転校生……？ぶるああああ！！

アレから、バルバトスの最後の一撃でアリーナが空襲のあったような状態になり、異形ISもバツキバキのズタボログシャベコになっていた。

そしてバルバトスが最後に「今日の俺は紳士的だ」などと抜かしていたが彼が本気だときつと跡形も残る事なく消滅していただろう……

あとは千冬達がISだったモノから奇跡的に無事だったコアを取り出したりしていたがバルバトス的には別にどうでもいいことなので割愛。

そして、クラス対抗戦も終えいつも通りの日常に戻っていた。

「バルバルが睨んで、みんなが怯えて、おりむーがぼっこんぼっこんにされちゃう……
コレって日常だねえ」

「嫌だ！！」

「そんな日常嫌だああ！！」

のほほんさんの言葉に一夏が叫ぶ。

なんとということでしょう、バルバトスの特訓はクラス対抗戦までで終わりかと思えばまだ続いているのです。

「……………」

ざわめいていた教室が静まる。

入って来た二人の内一人が男だったから。

「【シャルル・デュノア】です、フランスから来ました。

この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしく
お願いします」

転校生の一人、シャルルがにこやかな顔で自己紹介をする。

「お……男？」

誰かが呟く。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

……」

そこまで喋った所で

「きゃ………」

女子がやつとまともな男で綺麗な顔立ちに歓喜の声を上げ……かけ
た所で

キュピーン!!

何故かあの破滅への音が聞こえ

「ぶるああああ!!」

バルバトスがディアボリックフアングを持ち、シャルルに飛びかかる。

「貴様に男は騙らせねえ!!」

そして、振り下ろす。

ガキン!

が、それは千冬によって阻まれた。

千冬がどこからともなく取り出した剣で斧を受ける。

「教室で暴れるなゲーティア」

「ふん、貴様が相手でもいいんだぜえ……?」

バルバトスが斧だけでなく服装も完全に変わり千冬に殺気を向ける。

「ふ、いいだろう、ついて来い」

と言い、千冬とバルバトスは教室を出て行きどこかへ行ってしまった。

「……………え？」

山田先生が混乱する。

一夏は額に手を当てたため息を吐く。

教室は皆、呆然としていた。

(男を騙らせねーってバルバルが言ってたけど……
もしかしてあの転入生……うむむ)

一人のほほんさんだけが珍しく鋭く考えていた。

- - - - -

「え、えと、えと……」

そ、それじゃあ、あなたも自己紹介してくれる？」

皆が呆然としてる中やっこの思いで山田先生がもう一人の転入生に
言う。

「……………」

しかし転入生は黙り千冬達が出て行った扉を見つめていた。

「あ、あの〜」

(教………官?)

あの楽しそうな顔は……あの男は一体誰なのですか!?)

などと考えており、山田先生の声が聞こえていなかった。

ちなみにこの少女、名を【ラウラ・ボーデヴィット】と云ふ。

第8話 絶対的最強“漢”理論（前書き）

だ、ダメだ……

今回何かダメだ……

あんまり進めなかった。

あ、サブタイに意味はないです。

第8話 絶対的最強“漢”理論

場所、第二グラウンド

理由、二組との合同での模擬戦

と、言うわけでアレからバルバトスと千冬がいなくなり、ラウラが一夏をシバくような事もなく、授業に入った。

まあ、シャルルが何故いきなり殺されかけたのか分からず混乱しまくっていたが。

早々にバルバトスの恐怖を植え付けられてしまった。

そんなシャルルを一夏は心配しながら更衣室へと案内していった。

幸い、千冬が防いだからかセシリアや一夏のような症状は起きていなかった。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

いつの間にか帰って来ていた千冬が言う。

キリツとしたいいつも通りの顔で淡々と話すが、ボロボロであり、頭

からは流血している。

何があった。

「せ、先生……？」

何があったんですか？」

「……………ふっ、敗北はすれどいい勝負だった」

（（（……………一体何が……………）））

どこか清々しく笑う、千冬にみんな微妙な空気しか出せなかった。

（俺の姉は一体何者なんだ……

弟なのに全然わからねえ……………）

と頭を抱える一夏

それにしてもバルバトスが来てから頭を抱える回数がとても増えたね。

「まあ、そんな事はいい。

今日は戦闘を実演してもらおう、凰、オルコット！」

そう言い千冬が鈴とセシリアを呼ぶ。

「な、何故わたくし達が！？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ」
セシリアが問い、千冬が答える。

流血しながら。

止血しろよ。

しかし、鈴もセシリアも乗り気ではないようだ。

が、千冬が二人に何かボソツと呟いた瞬間、いきなりやる気になった。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

とセシリア。

「まあ、実力の違いを見せる良い機会よね！専用機持ちの！」

と鈴。

二人ともやる気満々である。

「それで、相手はどちらに？」

わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん、こっちの台詞、返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は……………」

そう千冬が言い、上を見上げる。

そして……

「ぶるああああー!!」

ヒューーーズドン!!

空から落ちきた……

「貴様らの相手は俺だぁ……」

バルバトスが。

「アイツだ」

「そん、な……」

「ウン……でしょ?」

やる気満々だった二人の顔が絶望に染まる。

「え、そんな……」

山田先生が相手なのでは!?

「え? 私? ど、どうしてですか?」

セシリアの言葉に山田先生が困惑気味に言う。

「いえ、だって原作が……」

はっ！？ わたくし今何と？ 原作って何ですよ！？」

いい感じに変な電波を受信していたセシリア。

「ふざけていないで早く始めろ」

「き、拒否っていうのは……」

「ない」

「ですよね」

逃げ道が完全に断たれうなだれる二人。

「ではさっさと始めろ」

千冬から模擬戦開始が言い渡される。

「くっ、鈴さん、ゲイティアさんは空を飛べませんわ
一度空へ行き、何か作戦でも考えた方がいいのでは？」

「そ、そうね……」

でも凄い嫌な予感がするんだけど」

そんな事を言い二人が上空へと飛ぶ。

バルバトスにとってコレは後退に入るかもしれないが、女なので何

もしない。

そして、上空で静止した二人は何かを話合う。

「どうすんのよ、はっきり言って勝てる気しないんだけど」

「わたくしもですわ……」

どうするか考える二人。

が、バルバトスは答えが出るまでは待つてくれなかった。

「貴様らやる気あるのかあ!!」

バルバトスの斧から毎度お馴染み、極太光線が二人に目掛け発射される。

「ひっ!」

「来たあ!?!」

チープエリミネイトをギリギリかわす二人。

それを見て、バルバトスが……

「空なぞ飛ぶんじゃねえ!!」

何か新カウンターを発動した。

二人の遙か足下にある地面に円が浮かび

「きゃ……………!!」

「え？ なに！？ 重っ！？」

エアプレッシャーと呼ばれる術により二人が空気の圧力で下へと引きづり落とされていく。

まさかエアプレッシャーがかなり離れた相手をも捉えるとは、バルバトスが出鱈目なのか。

そしてそのまま地面へと引き下ろされた二人に

「ぶるああああ!!」

バルバトスが赤い闘気のようなものを纏ったタックルをしかけ、二人まとめて吹き飛ばした。

第9話 バルバトスって殺劇武荒剣くらい使いそつだよね(前書き)

最近サブタイが適当になってきた……

第9話 バルバトスって殺劇武荒剣くらい使いそうだよな

「うふふふふ」

「あはははは」

「お、織斑先生!!」

二人が例の症状に!!」

セシリアと鈴がおかしくなった。

イビルチャージできりもみしながら二人が吹っ飛んだ後、こうなっ
た。

チープエリミネイトやカウンターよりはマシな攻撃だった気がする
がきりもみがダメだったのか……

「これでは授業にならない……
仕方ない」

そう言い千冬が取り出したるは伝説の出席簿、それを何の躊躇いも
なく

ズバン!!

ズドン!!

二人の頭に叩きつけた。

「ひぎっ!?!」

「~~~~~っ!?!?!?」

セシリアが悲鳴を上げ。

鈴が声にならない悲鳴を上げる。

(ズバンはまだ分かるけど、ズドンはダメだろ……)

一夏が頬をひくつかせながら思う。

ズドンはきつと脳細胞が2万個くらい死んでる。

「わ、わたくしは何を……?」

「頭が割れるように痛い……
ていつか割れたように痛い」

セシリアは頭を抑えてキョロキョロして、鈴が頭を抑えてプルプル震えながらうづくまっている。

というか、割れたようにって割れた事あるのか。

とまあ、そんな事もあったが二人は治った。

ちなみに、千冬の流血は止血した。

「さて、専用機持ちは織斑、オルコット、鳳、デュノア、ボーデヴ
イツヒ、ゲーティアだな。」

では八人グループになって実習を行う、各グループリーダーは専用
機持ちがやること。

いいな？ では分かれろ」

千冬が生徒達に向かい言う。

「バルバトスって……」

専用機持ちだったのか……」

乗らないのに何で持ってたんだよ、と一夏は内心でツッコむ。

とまあ、そういうやってる内に一夏とシャルルの周りに女子が集ま
ってくる。

「織斑くん、一緒に頑張ろう！」

「分からないところ教えて〜！」

「デュノアくんの操縦技術見てみたいなあ〜」

と、言う感じで見事、男二人に女子が集まる。

まあ、勿論の事バルバトスの所には誰もいない。

バルバトスはその事を気にした様子はなく、腕を組み目を閉じて

微動だにしない。

「この馬鹿者どもが……」

出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！

順番はさっき言った通りだ、次またもたつくようならISを背負ってグラウンドを百周走らせるぞ！」

千冬が額に手を当て面倒そうに言う。

それを聞いた生徒達は皆慌てて移動し、グループが出来上がった。

「最初からそうしる馬鹿者どもが」

はあ、と溜め息をつきながらそう呟いた。

「やったあ！ 織斑くんの班だ！」

一夏の班になった女子はきゃいきゃいと喜び

「よかったあ、セシリアの班だ」

セシリアの班になった女子は安心し

「鳳さんの班だったー！」

よろしくね」

鈴の班になったものも安心し

「やったやった！」

デュノアさんの班、よろしくねっ！」

シャルルの班は一夏と同じく喜ばれ

「あ、危ない危ない……」

ポーデヴィツヒさんの班でよかった……」

無愛想で何も喋らない、というかコミュニケーションを拒絶しているラウラの班でも安心され

「私は神を呪う」

「同じく」

「同意」

「わゝ、バルバルの班だゝ」

バルバトスの班は見事に皆、絶望的な表情をしていた。

一人を除いて。

「ええと、いいですか、皆さん

これから訓練機を一班一体取りに来てください

数は【打鉄】、【リヴァイブ】が三機ずつです

好きな方を班で決めてくださいね、あ、早い者勝ちですよー」

その言葉で皆一斉に動き出す。

が、バルバトスの班には既に【打鉄】を持って来ていた。

バルバトスが山田先生の話が終わる直前にかっさらって行ったのであった。

「乗れい」

「は、ははははい!!」

バルバトスの言葉に怯えながら返事をし、女子が打鉄に乗り、起動する。

そして、それを見たバルバトスはディアボリック・ファングを取り出し、臨戦態勢になる。

「さあ、始めようぜえ……」

「え？

……ええええええええええ!!」

当然の事ながら驚く女子。

「な、何ですか!？」

ISの扱い方を教えてくれ「実戦で上手くなれい!!」

女子の言葉を遮りいつか聞いた台詞を言うバルバトス。

バルバトスの班の女子達はこの言葉を聞いてもう色々諦めた。

ただし一人は覗いて。

「ぶるあああああ！！」

「いやあああああ……！！！」

閑話？またの名を繋ぎ。(前書き)

今回はちょっと書く時間が無かったので短いです(いつも短いけど
ねっ!!！)

閑話？またの名を繋ぎ。

「あははははは……」

「うふふふふ……」

バルバトスの班の女子は皆こうなった。

南無。

「お、織斑先生！ あははうふふ症候群が!!」

何という事だ……

とうとう例の症状の名前も決まってしまった。

「いたた」

やっぱりバルバルは強いねえ」

何と、驚く事に一人生還した者がいた。

台詞で分かるだろうが、のほほんさんである。

千冬に続き、超地球人が現れた瞬間だった。

「取り敢えず保健室へ運べ」

千冬が指示を出す。

治してやれよ。

- - -
とまあ、バルバトスが素人に無双した後、セシリアのサンドイッチが殺人級だったりとか箒にあーんとか色々あったがバルバトス的には全く興味ない事だったので超割愛。

ある日のとある場所。

そこで二人の人物が話していた。

「お願いです、教官。」

我がドイツで再びご指導を、ここではあなたの能力は半分も生かされません」

ラウラと千冬である。

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。」

そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど……」

「そこまでしておけよ、小娘」

千冬はラウラの言葉を低く凄みのある声で遮る。

「少し見ない間に偉くなったな、十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

ラウラの声が震えている。

「それにな、ラウラ。」

私はゲーティアのいるこの学園を離れたくはないのだ」

ポツリと千冬が呟く。

「え？」

「さて、授業が始まるな、さっさと教室へ戻れよ」

そう言い千冬は歩いて行った。

ちなみに、千冬のバルバトスがいるから離れたくない発言は別に恋愛の意味とかそんなんじゃないやなく、あいつとの戦いは楽しいから離れたくないんだと言う意味だったりする。

思いの他、千冬さんはバルバトスに似てきていた。

「……………ゲーティア……………」

バルバトス・ゲーティア……………」

そうか、アイツが……！」

しかし何か妙な勘違いをしたラウラは完全に標的をバルバトスに変えた。

「あ。あと弟も心配だからな」

そして去って行く千冬は思いだしたかのように呟いていた。

第10話 チープデストロイプレイヤー（前書き）

次話を書いている途中に充電が満タンにもかかわらず
いきなり携帯の電源が落ちて書き直しになって、ちよつと携帯を逆
に折りたたもうかな……？って本気で考えてた（あ

第10話 チープデストロイプレイヤー

場所、アリーナ

セシリア&鈴VSバルバトス

「「そんな馬鹿な」」

セシリアと鈴が揃ってそんな事を言う。

何でこんな事になっているかと言うと、二人は今度の学年別トーナメントに向けて特訓をしようとアリーナへやって来たら、セシリアと鈴が鉢合わせて、いがみ合っているとバルバトスもやって来て強制的にバルバトスの相手をさせられるようになってしまったという。

「くっ、何時もボコボコにされて終わるから今日は何時もより早く来て、私なりの特訓をしようと思ったのにつ……………!!」

「わたくしもですわ……………」

鈴が拳を握りしめ悔しそうに一筋の涙を流す。

そうしセシリアは色々と諦めて溜め息を吐いた。

「ていうか、一夏はどうしたのよ!?!」

と鈴が言うが、今一夏はシャルルと用事を片付けているためいない。

「ぶるあ……」

二人がなんだかんだと言っている内にバルバトスは準備完了。

二人に殺気を向ける。

「っ!!」

はあ、ホント最近、負ける事に慣れて来て困るわ……

私、代表候補生なのになあ……」

鈴が遠くを見つめながら呟く。

「でもしょうがないわよね、いいわ、やってやるわよ!!」

何か今日はいい予感がするし!!」

「わたくしはいい予感はありませんが、逃げれたためしありませんし……」

やるしかないですわよね」

二人がやる気になりバルバトスと向き合う。

鈴は双天牙月を構え、セシリアはスターライトmk?をバルバトスへ向ける。

そして、2対1だと言うのに圧倒的不利の戦いが今開s

ドオオオオオオオン!!

「「!?!?」」

突然、超音速の砲弾が飛来する。

二人はとっさに緊急回避をし、砲弾が飛んできた方向を見る。

そこには漆黒の機体が佇んでいた。

ちなみにバルバトスは砲弾を避けずらしなかった、何故なら多少のダメージにさえならないから。

というかバルバトスの辞書には避けるという言葉はない。

話を戻そう。

漆黒の機体……機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者

「ラウラ・ボーデヴィット……」

セシリアが呟く。

「ちょっとあんた……」

鈴がぶるぶると震えながら、低く怒気のコもった声を出す。

「せつかく私達が決心したのに水刺してんじゃないわよ!!」

「怒るところ、そこですよ!？」

ガーツ!と怒鳴る鈴とそれをツッコむセシリアを完全に無視し、ラウラはバルバトスだけを見据える。

「バルバトス・ゲートティア……」

「何だ、貴様は」

バルバトスはラウラを睨みつけながら言葉を発する。

「貴様が……」

貴様がいるから、教官は……」

ラウラは俯きながら呟く。

「アイツ、何言ってるの？」

「さあ……?」

「ちょっと聞き取れませんかね」

鈴とセシリアは首を傾げている。

ラウラは俯けていた顔を上げバルバトスに

「私と戦え、バルバトス・ゲートティア!!」

そう言い、右肩のレールカノンをバルバトスへと発射した。

ズドオオオオオン！！

バルバトスへと着弾し、土煙があがる。

「うそっ！ 当たった!？」

「ゲーティアさんが弾きもしないなんて……」

鈴とセシリアが驚き、バルバトスの方を見る。

そして……

「貴様に……」

土煙が段々と晴れていき……

「俺と戦う資格は……」

そこにはラウラへと斧を向けた“無傷”のバルバトスが立っていた。

「ぬえええええい！！！！！！」

そして、斧から光が溢れ、今までに見たことがない程巨大なチープ
エリミネイトが発射された。

第11話 更なる死亡フラグ（前書き）

この小説……

最初はギャグゴメみたいなノリで行こうと思ってたのに、もうホン
トラウラがギャグじゃねえよ……

第11話 更なる死亡フラグ

ゴオオオオオオ……

バルバトスのチープエリミネイトにより土煙があがる。

煙のせいでラウラの姿は見えない。

「ふん、興が冷めた」

バルバトスはそう言い残しアリーナから去って行った……

「……………」

「……………」

言葉が出ない鈴とセシリア
ただ呆然とラウラがいた方を見つめる。

「じ、冗談抜きで死んだんじゃないの……？あれ……………」

「わたくし達が普段どれほど手加減されてるかよく分かりましたわ……………」

改めてバルバトスの恐ろしさを実感した二人。

そして土煙が晴れる。

そこには……

「くっ……」

悔しさに顔を歪めているが、健在のラウラがいた。

説明しよう！

何故ラウラが消し飛ばずに生きていたか！

そう、それは単純に瞬間加速イグニッション・ブーストでチープエリミネイトを回避したから。

かなりの速度で迫るチープエリミネイト（特大）を普通に避けるのは困難だったと、そう言う訳である。

「良かった、生きてた……」

「流石に目の前で死人が出るのはキツすぎますわ……」

ホッと胸を撫で下ろす二人。

鈴。撫で下ろしやすい胸で良かったね

「あゝあゝん？」

サーセン。

「バルバトス・ゲーティア……」

この恨みは必ず晴らしてやるぞ……必ず……！！！！」

電波にキレル鈴やセシリアをガン無視してラウラはバルバトスへの敵意を更に募らせるのだった……

ちなみに、それから数分後にやって来た一夏とシャルルは何でこんな事になっているのか大いに困惑したそうなの

バルバトスの特訓（と言う名の地獄）をする事もなくなったが、自らの特訓をする気にもなれず、一夏達と合流し、なんとなくアリーナから戻った鈴とセシリア。

適当にぶらつきながらバルバトスとラウラの事を話していたら一夏とシャルルに大量の女子が殺到した。

「織斑くん!!」

「デュノアくん!!」

「な、なんだ、なんだ!？」

「み、みんなどうしたの!?　ちょ、ちょっと落ち着いて……」

「『コレ!!』」

状況の飲み込めない二人に女子一同が出してきたのは学内の緊急告知文が書かれた申込書だった。

「え、えつと、なにになに……?」
一夏が出された紙を読む。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的に行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」

「ああ、そこまででいいから!とにかくつ!」

女子達が一斉に手を伸ばし

「私と組もう、織斑君!」

「デユノアくん、私と組もつ!」

突然の学年別トーナメントの仕様変更で、男子と組もうと我先にと男子である一夏とシャルルに迫る女子達。

「な、なに言ってるのよ! アンタ達!

「一夏と組むのは私よ!」

「いいえ、わたくしですわ!」

そんな女子達を見て慌てて鈴やセシリアも便乗する、が

「悪いけど、俺はもうシャルルと組んでるぞ」

と、一夏がそんな事を言った。

「『えええええ』」

女子達が落胆したように声を上げる。

「あんたらいつの間に……」

「残念ですわ……」

二人も悔しそうにするが、二人はシャルルを男だと思っているため、それ以上は何も言わなかった。

「ほえ、二人一組かあ」

廊下を歩くのほほんさんが紙を見ながら呟く。

すると視線の先にバルバトスを発見。

「あ、バルバル」

「コレ、一緒に組まない？」

と、もう普通に友達のようなノリで言うのほほんさん
流石である。

「布仏。残念だがそれは無理だ」

すると後ろから千冬の声。

「あ、先生」

どうしてですか？」

のほほんさんが頭に？を浮かべ首を傾げる。

「ゲーティアは今まで見た通り、アレだからな
ハンデとして1人で参加する事になった」

まあ、その程度でハンデになるかは分からんがな、と微笑みながら言う。

「それでも構わんのだろう？ ゲーティア」

「戦えるのであれば、俺は何でも構わん」

千冬の言葉にバルバトスは答える。

ちなみにバルバトスは基本的に1人で戦うが共闘戦と言つのも出来る。

ただバルバトスと共闘できるほどの強さを持つ者がいないだけである。

「そっかあ」

じゃ、他を当たってみるよー

じゃあねえ、バルバル」

のほほんど手を振りながらのほほんさんは去って言った。

「ゲーティア」

のほんさんが視界から消えた後、千冬はバルバトスへ話しかける。

「何だ」

「ラウラの事だが……
遠慮なくやってくれて構わん」

と千冬はそんな事を言った。

「ほう？」

「アイツは何を勘違いしているのか、お前が消えれば私がドイツへと帰ってくると思っっているらしくてな
アイツは少し頭を冷やした方がいい」

「ふん、いいだろう」

千冬 of 言葉を聞いて、バルバトスはそれだけ言って、千冬に背を向けて歩きだした。

「一つ言っておくが、殺したりはするなよ？
アレでも私の大切な教え子だからな」

千冬は去って行くバルバトスの背中にそう言葉を投げかけた。

第12話 無茶しやがって……（前書き）

初めて真面目に戦闘を書いた、難しいね

まあ、最後はやっぱりバルバトス無双なんだけど

今回のバルバトスさん

最初の内は難易度ノーマルくらい

最後は最低難易度の最強バルさん

ちなみに最後にバルバトスの使った技は小型のワールドデストロイヤーを叩きつけてる感じ。

第12話 無茶しやがって……

学年別トーナメント開催日。

「す、すごいな、こりゃ……」

一夏が更衣室のモニターを見ながら驚く。

映っているのは観客席で、そこには各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会いしていた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。

一年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

そんなに興味がないのかシャルルの説明に適当に返答する一夏。

「ていうか、バルバトスを見たらどう思うんだろうな」

一夏が言う。

あんな理不尽と出鱈目の塊をみれば10人が10人度肝を抜かれるんじゃないだろうか。

のほんさんのような者がいれば話は別だが

「あははは……」

シャルルが微妙な笑いを上げる。

断じて症候群が発症したわけではない。

- - - - -

対戦表が決まる。

「な……」

一回戦目からなのか……」

「た、大変だね」

一夏とシャルルが驚く。

二人が驚く対戦表、第一回戦は……！

【ラウラ・ボーデヴィツヒ 篠ノ之 箒ペア】

VS

【バルバトス・ゲーティア】

なんと、一夏&シャルルペアではなくバルバトスだった！

「俺、一回戦じゃなくてよかった……」

「でも、あの人が勝ったらいずれ戦う事になるけど……」

一回戦から波乱の予感。

.....

「くく……」

ラウラが笑う。

一回戦目からバルバトスと戦える事が嬉しいのだ。

まあ、嬉しいと言っても爽やかな感じじゃなく、むしろドロドロと
してるのだが……

しかし、ラウラが段々と狂気に染まっていつている。

歪んだ笑みを浮かべながらラウラはアリーナへ出る。

.....

バルバトスとラウラ&箒が向き合う。

「この間のようにはいかんぞ

貴様はここで終わりだ」

ラウラが言い

「ふん、出来るものならやってみろお……」

バルバトスが答える。

両者睨み合い、そして箒は空気だった……

試合開始、5秒前

4

3

2

1

試合開始。

「貴様は俺と戦う資格はねえええ!!」

開始直後にバルバトスの斧から光線が発射される。

箒に向けて。

「なっ!?!」

光線は回避をしようとする箒を無情にも飲み込んで行った……

箒、退場。

「くっ……」

久しぶりの出番だと言つのに……こんな終わり方……！！」

箒の悲痛な呟きはアリーナにいる人達の声にかき消されていった……

「あとは、貴様だぁ……」

バルバトスがラウラに言う。

「ふ、アイツを倒した所で私が不利になるような事は何もない、行くぞー！！」

ラウラがバルバトスへと近づき、プラズマ手刀による斬撃を繰り返す。

「甘いわー！！」

バルバトスはその手刀を素手で掴み、ラウラを上空に放り投げる。

そしてラウラへ向けてチープエリミネイトを発射する。

「ふっ」

ラウラは瞬時加速を行い、避ける

そしてバルバトスの腕へとワイヤーブレードを巻き付け

「何い！」

バルバトスをアリーナの壁へと叩きつけ

「くらうがいい!!」

レールカノンを発射した。

発射された弾はバルバトスへと直撃する、が

「ぶるああああ!!」

やはりバルバトスにはそんなにダメージはない。
バルバトスはラウラへと接近し、斧を振るう。

「ぶん……」

ラウラが右手を突き出す

「ぬう……」

するとバルバトスの斧はラウラに当たる事なく止まる。

ラウラのIS、シユヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器『A
IC』

慣性停止能力である。

「貰った!!」

止まったバルバトスへとレールカノンをほぼ零距离で撃つ

「ぬっ!!」

吹き飛ぶバルバトス、しかしすぐに空中で体制を立て直し、着地する。

「ほう、なかなかやるな小娘」

バルバトスが喋る。

「ほざけ、貴様はここで終わりだ!!」

ラウラは再びワイヤーブレードを発射し、バルバトスの両手足に巻き付け、拘束し、バルバトスを引き寄せ……ずに自らバルバトスへと近づく

(こいつの強さは計り知れんからな、下手に引き寄せようものなら逆に振り回されかねん)

そしてプラズマ手刀をバルバトスへ叩き込む、続けて蹴りを入れ、更に殴り、再び蹴りを入れ、また殴りつける。

バルバトスに反撃を許さず、凄まじい連打を重ねる。

しかし、相手はバルバトスである。

このまま攻撃を受け続けるはずがない。

「ぶるああああ!!」

「何っ!?!」

バルバトスはワイヤーブレードを力づくで引きちぎり

「虫けらが!!」

ラウラの首を掴み

「這いつくばれい!!」

地面へと叩きつける。

「ぐっ……」

叩きつけたラウラを更に追撃する

「貴様に朝日は拝ませねえ!!」

バルバトスが地面を殴りつけるとバルバトスを中心に紫色の巨大な

衝撃波が発生しラウラを吹き飛ばす。

「くうう……！！！」

吹き飛ばすラウラに更なる追撃を繰り出す。

「引き裂いてやるわぁ……」

バルバトスが斧を振るうとラウラへ向かって衝撃波が飛び出す。

「く、この、程度お！！！」

ラウラが殆ど気合いのようなモノで体制を立て直し、衝撃波を避ける。

「これで、勝ったと思うなぁ！！！」

そう叫び、レールカノンをバルバトスへと放つ。

「ぬん！！！」

それを斧で弾き、バルバトスはラウラへと突っ込み、斧を振り下ろす。

「無駄だぁ！！！」

ラウラはAICを発動し、バルバトスを止める、が

「術に頼るか、この屑がっ！！！」

みんな大好き、カウンターが発動、斧から赤い炎の弾が32発飛び

出し、追尾機能によりラウラの背後へと回り命中する。

「がっ……………」

「これで終わりだぁ……………」

ヘルヒートの命中によりAICの切れたラウラへと斧を突き出し

「微塵に碎けるお!！」

ジェノサイドブレイバー発射した。

……………

「う、うわぁ……………」

「お、恐ろしいですね……………」

バルバトス達の戦闘を見ていた鈴&セシリアが冷や汗を流しながら
呟く。

「分かつてはいたけど、これは完全に……………」

「ゲーティアさんの勝ち、ですね」

二人はジェノサイドブレイバーにより吹き飛んだラウラを見て、そ
う言った。

次の瞬間――

「なっ!？」

「なんですの……あれは？」

――

(何故……)

ラウラは思う。

(何故だ……何故、勝てない……)

その思いは次第に巨大な増悪へと変わっていく。

(バルバトス・ゲートィア……)

奴を倒したい、倒し、そして教官を……)

バルバトスへの果てしない増悪の中、ラウラはただ一つの事を願う。

(力が……欲しい)

ドクン……

『願うか……?』

『汝、自らの変革を望むか……?』
『より強い力を欲するか……?』

ラウラの頭に声が響く、今のラウラにそれを拒否するような考えなど何処にもない、ラウラは迷う事無く力を欲した……

.....

「あああああつー！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発する。

それと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれる。

「む……？ なんだ？」

そのような奇妙で尋常じゃないラウラをバルバトスは凝視する。

アリーナの皆が目を疑う。

ラウラのISが変形、というより、黒く濁ったナニカがラウラを飲み込んで行く。

「……………あれは」

それを見るバルバトスが何か気づいたように目を細めていた。

シュヴァルツェア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながら、ゆっくりと地面へと降りると

高速で全身を変化、成形させていく。

そしてそこに立っていたのは、黒い全身装甲のISに似たナニカ。

そして、その異形ISの手には雪片が握られていた。

「貴様あ……………」

バルバトスが異形ISを睨みつける。

異形ISは常人ならば気絶する程の殺気を当てられても怯むようすはまるでなくバルバトスへと迫り、雪片を振るう。

キンッ！！

振るった雪片はバルバトスへと当たるが、弾かれた。

バルバトスさん、本気入りましたー

そう、みんなご存知、鋼体である。

異形ISは感情があるのか、無いのか、それは分からないが弾かれたのを見ても動揺する様子もなく、更に攻撃を繰り返す。

キンッ！キンキン！！

キンキンキンッ！！

攻撃はことごとく弾かれ、バルバトスには意味をなさない。

だが次の瞬間。

キュピーン!!

破滅の音がどこからともなく聞こえ、バルバトスが異形ISの前から姿を消す。

そして……

「他人の力に……」

異形ISのすぐ背後へ現れ

「頼ってんじゃ、ぬええええい!!!」

最強の一撃を繰り出した。

第13話 もはやお前誰だよ（前書き）

書いた本人が何故ラウラがこんな事になったのかよくわからない（え

本当になんでこうなったんだろ

第13話 もはやお前誰だよ

バルバトスの一撃により異形ISは崩壊していく……

バルバトスは形が崩れていく異形ISの中にいるラウラの首を掴み、引きずり出し

「小娘、この俺を倒したいのであれば、借り物の力なぞ使わず自らの力でかかって来るがいい」

そう言った。

「うう……」

(バルバトス……ゲイティア……お前は……なんて……)

そこまで思い、ラウラの意識は完全になくなった。

そしてバルバトス近くにいる箒(実はずっといた)にラウラを投げ渡し、バルバトスはアリーナから出て行った。

「末恐ろしい男だな……」

ラウラを抱き、箒はそんな事を呟いた。

.....

バルバトスが一瞬で片付けてしまったため、さほど騒ぎにはならなかったが、ラウラの異変は誰が見ても異常事態だったために、トナメントは一時中止になった。

後日に一回戦だけでもやるらしい。

とまあ、それは置いておき

「げ、ゲートイアさん」

廊下を歩くバルバトスに声がかかる。

声の主は山田先生である。

「何だあ」

「ひう！ え、えと、その……
き、今日から男子の大浴場が使用出来るようになりました……！」

山田先生はまだバルバトスが怖いようだ

まあ、学園の殆どがバルバトスを恐れているだろうが。

「そうか」

山田先生の言葉に短く返答する。

「そ、それだけです！

それでは！」

そう言い山田先生はパタパタと去って行った。

「風呂か……」

バルバトスはそう呟き、歩いて行った。

それから数分後

大浴場で斧を一振りして浴槽の湯を消滅させているバルバトスが
夏により目撃された。

何にしてんだ。

- - - - -

さて、翌日のホームルーム。

「み、みなさん、おはようございます」

山田先生がやってくる、が、何故かフラフラしている。

「今日ですね……」

みなさんに転校生を紹介します。

転校生といいますが、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええ
と……」

山田先生の話にクラスみんなは一斉に騒がしくなる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

山田先生に呼ばれ、入って来たのは……

「シャルロット・デュノアです。」

皆さん、改めてよろしくお願ひします」

スカート姿のシャルルだった。

ポカンとする、クラス一同、まあもちろんの事バルバトスは平然としているが。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした、ということですよ。」

はあ………また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります………」

溜め息を吐く山田先生。

ご愁傷様です。

「え？デュノア君って女………？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「ああ、やっぱり女の子だったんだあ」

ザワザワと騒がしくなる教室

その中でのほんさんはやっぱり、と言うような表情をしていた。

「一夏……?」

これは一体どういうことだ?」

箒がスラツと刀を抜き一夏に聞き

「一夏さん……?」

セシリアがあ那时的のようにハイライトの無くした目で一夏に迫る。

ちなみに一夏はシャルルと同室だった。

「こ、怖っ!?!」

お、落ち着け、箒、セシリア!」

チユドーン!!

「いゝちゝかあゝ!!」

次に壁をぶち破って鈴が来た。

ISを展開して。

教室で展開してんじゃねえよ。

怒り浸透の鈴は一夏へ向けて、衝撃砲を撃とうとする

その瞬間!

ピシャーン!!

教室の扉が勢いよく開かれる。

その音で皆が皆、入り口に注目する。

そこにいたのは……!

「ぼ、ボーデヴィツヒさん? 遅刻ですよー?」

そうラウラだった。

ラウラは山田先生の言葉を無視し、一直線にバルバトスの元に行く

そしてバルバトスの席の前に立ち止まった。

教室は静まり返る、まさかこんな所で再び戦いを始める気が、というような緊張が走る。

「私を……」

皆が固唾を飲み見守る中、先に動いたのはラウラだった

ラウラは何か決意に溢れた目で

「私を弟子にしてください!!」

そんな事をのたまった。

教室が先ほどとは別の意味で静まり返る。

「何？」

バルバトスが怪訝な表情で聞き返す。

「変質してしまった私を倒したあの力……

私はあなたの途方もなく絶大な力に心を奪われてしまいました……だからお願いします！」

私を、私を弟子にしてください、バルバトスせんせい師匠!!」

もはやお前誰だよ。

ラウラの言葉を聞いた皆が皆、微妙な顔で汗を流していた。

「お、お前、この男を恨んでいたのでは無いのか……?」

篤がラウラに聞く。

「ふん、何を言っている？」

そんな昔の事、忘れた」

「」「昨日だよ!」「」

とうとう我慢出来なくなったのか、皆がツッコむ

「ふ、昨日は昔だ、一秒前だって昔だ」

どこか『してやったり』、というような表情をするラウラ。

「うん、ちょっと今からアンタをボコる」

鈴が怒りマークを浮かべ口をひくつかせながら言う。

「くく……」

貴様が私を？

師匠せんせいの一番弟子である私が貴様なんぞに負けるはずがなかるう？

いつの間にか弟子になっているラウラ。

「ふ、ふふふ……」

いいわ、表にでなさい」

なんかもう色々とかオスになっていく。

「あわわわわ、ど、どうしましょう……」

山田先生が慌てふためく。

その混沌とした中に、1人の救世主が現れた……!

「おい、お前ら」

凜、とした声が響く。

「な、お、織斑先生……？」

「き、教官？」

千冬だった。

「鳳 鈴音、ラウラ・ボーデヴィツヒ
反省分1万枚」

そして二人に途方もない罰が下された。

「僕のインパクトが一瞬でかき消されちゃった……」

シャルロットの呆然とした咳きは誰の耳にも入る事はなかった……

そしてどうでもいい事だが、バルバトスの一番弟子はもしかしたら
一夏かもしれない。

第14話 臨海学校編 だがまだ臨海学校には行かない。(前書き)

今回は超短いです(まあ何時も短いけどね!)

あと、あんまりネタ的なのも浮かばなかった……

第14話 臨海学校編 だがまだ臨海学校には行かない。

朝。

まだ生徒の殆どが寝ているであろう早朝のアリーナに人影が二人。

「ぶるああああ!!」

みんな大好きバルバトスと

「ハアツ!!」

自称バルバトスの一番弟子ラウラだった。

二人でこんな朝早くから何をしているのかと言うと、模擬戦のような特訓のような修行のような、まあ戦いである。

ちなみにバルバトスは何時朝早くからアリーナにいたりする。

それをラウラはバルバトスと同室であるのほほんさんから聞いており、参加したのである。

バルバトスとしても弟子がどうのこうのはいいとして、戦えるのであれば何でもいいのだ。

「貰った!!」

「俺の背後に立つんじゃない!!」

ズドーン!!

もちろんの事、この戦いはバルバトスの勝ちに終わった。

「今日は通常授業の日だ。」

IS学園生と言ってもお前達の扱いは高校生だ、赤点など取ってくれるなよ」

千冬が言う。

IS学園でも数は少ないが普通の授業をする。

そんな授業でもバルバトス(32)はちゃんと受ける。

まあ、ちゃんとは言ってもノートをとったりなどはせず全て聞いているだけだが。

というかバルバトスがノートをとる姿など想像出来ない。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物など

するなよ。

三日間だが学園を離れることになる。

自由時間では羽目を外しすぎないように」

校外特別実習期間、すなわち臨海学校である。

一夏とバルバトス以外は全て女子の臨海学校である。

とんだパラダイスじゃないか。

しかし、一夏は浮かない顔をしている。

まあ、一夏だから当たり前なのかもしれない。

バルバトスは……もはや言うまでもない。

「ではSHRを終わる。各人、今日もしっかりと勉学に励めよ」

そう言って、千冬は出て行った。

第15話 臨海学校編 だがやはりまだ行かない。(前書き)

最後グダグダになった……

第15話 臨海学校編 だがやはりまだ行かない。

週末の日曜日。

決して終末ではない。

みんなが喜ぶ日曜日、一夏とシャルルは街に来ていた。

理由は臨海学校用の水着を買いに。

そして一夏は何時も通り、上条さんバリの鈍感さを発揮しており、別に何かを気にする事もなく、平然とシャルルと手を繋いでいた。

てかいつの間にシャルルとフラグ立ててたんだ。

そして、そんな二人を物陰から見つめる者がいた。

「ねえ……」

「なんですの……?」

毎度お馴染み、鈴 & amp; セシリアである。

「あれって、手握ってない……?」

「握ってますわね……」

そんな事を話す二人の瞳に光は灯っていなかった。

もしかしたらこの二人は今から一夏を背後から包丁で刺すのかもしれない。

「そっかあ、見間違いでも白昼夢でもなく、やっぱりそっか……」

鈴が笑う。

しかし、目は笑っていない。

「ふふ……」

よし！ 殺そうー！！」

と、ISを部分展開し言う、身体から赤いオーラが出ていた。

もっとキレたらバルバトスのようなオーラが出せるかもしれない。

「ほう、楽しそうだな」

そんな二人に背後からかかる声。

「！！ ラウラさん！」

ラウラも来ていた。

「あんだ、何しに来たのよ」

鈴が問う。

「師匠せんせいが街に出ると言ってな、ついて来たのだ」

ラウラが答える。

「げ、ゲイティアさんが？ 珍しいですわね……」

セシリアが驚く

暇な時はいつもアリーナにいるバルバトスが、街に来たと言つのは結構衝撃なのかもしれない。

「で、どこにいるのよ？ 見当たらないけど……」

鈴がキョロキョロと辺りを見回す。

「ああ、見失った！！」

ラウラが笑顔で言い切った。

「「ええ！？」」

当然驚く二人。

「いや、つい先ほどまで私の目の前にいたというのに、まばたきをした瞬間いなくなつてな。

やはり流石だ……」

何故か嬉しそうに言うラウラ。

しかし“目の前”？

つまりラウラはバルバトスの後ろにいたと言つこと……

よく無事だったな。

「あんな歩く核兵器みたいなのを見失うんじゃないわよ!!」

鈴がキレる。

「貴様……師匠を侮辱する気か!!
師匠が核程度で収まるものか!!」

「そつちですよ!?!」

ラウラの言葉にセシリアがツッコむ、最近セシリアは順調にツッコミキャラが定着しつつある。

「ま、まあ、いいわ……
とにかく今は一夏達を……!!
つてどこ行ったの?」

鈴が一夏達がいた方に振り返るが、二人はもういなかった。

「ああ、あの二人なら先ほどそこを降りていったが」

ラウラが指をさし言った。

「っ!! 行くわよ、セシリア!!」

「ま、待ってください鈴さん!!」

二人はラウラの示した方へと走りだした。

「ふん、慌ただしい奴らだ。」

さて、私は師匠を探るか……」

そう言い、ラウラは歩きだした。

その頃の一夏はシャルルに二人の間だけの呼び方を決めていた。

結果。

シャルルになった。

ぶつちやけシャルルから一文字減っただけである。

だがそれでもシャルルは大喜びしていた。

「そんじゃ、行くか」

「うん!!」

と、二人はまた店に向かい歩きだした。

「あつ、いた!!」

「よかった、無事見つかりましたわ……」

鈴とセシリアである。

一夏達を何とか見つけたようだ。

「……………ねえ、シャルロットがさっきより嬉しそうな顔してるん

ちなみに一夏達は更衣室に隠れていたりする。

「ほう、ここにある物全て水着なのか」

二人の背後からそんな声が聞こえてきた。

「ラウラ！ あんたいつの間に!？」

「む？ お前達がこの店に入る時からいたぞ？」

鈴が驚き、ラウラは平然としている。

「ラウラさんは何をしてらっしゃるの？」

セシリアが聞く。

「うむ、師匠を探している所なんだが……」

ここにはいないな」

「女の子の水着売ってる場所にいたら逆に凄いいけどね……」

鈴が呆れたように言う。

バルバトスは一体どこに行ったのだろうか……

「お前達は何をしているのだ？」

ラウラが二人に問う。

「あ！ そうよ、一夏達を探してるんだった！」

鈴が思い出したように声を上げる。

「む……」

「一夏とシャルロットならば、あそこで説教を受けているぞ」

ラウラが指をさす。

二人がラウラが示した方に視線を移すと、山田先生に怒られている

「一夏とシャルロットがいた。」

千冬も一緒にいる。

「な……、先生達も来てたの……!?!」

「どうしましょう……」

「? 合流すればいいではないか」

うるたえる二人を置いてラウラは一夏達に近づぐ。

「あつ! ら、ラウラもいたの!?!」

ラウラを見て驚くシャルル。

「ラウラも水着を買いにきたのか?」

「一夏が聞く。」

「いや、師匠を探しているのだ」

「師匠……、ゲータアもいるのか……」

「はい、教官」

しかし、見失ってしまいました」

千冬の咳きにラウラが答える。

「街にバルバトスがいるって、な、何か怖いな……」

一夏が冷や汗を流す。

そして……

オオオオオン……

店内に何かいいよのない空気が広がる。

「ん……？ 何か空気が重くなったような……？」

一夏が辺りを見回しながら言った、その時

「……貴様ら、こんな所で長々と何をしている？」

奴の声が響く。

そして、一夏達の目の前に大きな人影が現れる。

そう、それは……

「鼠のように逃げおおせるか、この場で死ぬか、どちらか選べい！」

バルバトスだった。

格好が完全に戦闘モードである。

実はバルバトスは、ラウラと箒だけだと物足りないから街にいった一夏、シャルル、鈴、セシリアを連れ戻しに来たのだった。

ちなみに箒はラウラと一緒にバルバトスにボコられて心身ともに疲れたので学園に残った。

何故一緒にボコられたラウラはこんなに元気なのか謎である。

症候群が発症しない……だと？

「師匠！」

「ゲーティア……、こんな所で殺気を出すな」

ラウラが声を上げ、千冬が呆れ気味に注意する。

「行くぞお……」

バルバトスは一夏とシャルルの襟首を掴み連行していく

「は？ え！？ ちょ、ちよつと！？」

「うわわわわ！！」

ジタバタとする二人。

「ああ、ゲーティア

一夏は置いて行ってくれないか？ 少し用がある」

千冬がバルバトスに言う。

「他は連れ帰っても構わん」

「「「え！？」「」」

一夏、ラウラ、山田先生以外が驚く。

「いいだろう……」

バルバトスは千冬の申し出に了承すると、一夏を離し、残りを連れていった。

「ちよっ！ 助け……！！」

「嫌ですわ！ せっかく街に来たのに！」

「うわあああん、一夏あー！！」

一夏はみんなの叫びをただ聞く事しか出来なかった。

「すまん……！みんな……！！」

「それでは教官、また学園で。」

師匠！ 待ってください！」

千冬に頭を下げ、ラウラもバルバトスを追って行った。

「ふむ、では行くか」

「ああ……、でも何するんだ？」

「なに、お前に私の水着を選んでもらおうと思っただけ」

バルバトス達を見送り、二人はそんな話をしながら歩いていった……

「あ、あの！ 私もいますよー！？」

山田先生も慌てて二人を追っていった。

【番外】正直必要性がなさそうなキャラ紹介「またの名を繋ぎ」

【織斑 一夏】

バルバトスに対する感情：畏怖

世界で初めてISに乗れた男

何故乗れたのか謎、あの天災さんが関わってるのかもしれない。

一級フラグ建築士、モブ達も含めるとあの上条さんを超えてるかもしれない。

バルバトスが学園に来てからは頭を抱える事が多くなった。

バルバトスの特訓（と言う名の惨劇）を強制的にやらされて、精神が不安定になった時もあったが、実はかなり強くなっている。

その内特訓でセカンドシフトするかもしれない、と言うほど。

バルバトスがIS学園でボコした二人目の人物

うふふあはは症候群発症者

【篠ノ之 篤】

バルバトスに対する感情：畏怖

一夏のファースト幼馴染み

一夏が好きだが素直になれないクールビューティー

キレると木刀でシバかれる、本気でキレると真剣をどこからともなく出してくる。

バルバトスを余り良く思っていない。

しかしバルバトスの特訓に強制的に付き合わされて訓練機でも専用機と十分戦える強さになってしまった。

バルバトスがIS学園でボコした三人目の人物。

書かれてはいないが症候群発症者。

【セシリア・オルコット】

バルバトスに対する感情：恐怖

イギリスの代表候補生

以前はプライドの高い高飛車のいかにもなお嬢様だったが一夏に惚れてからは面白い子になった。

最近は恋敵が増えて気が気じゃない。

しかし、よく鈴と一緒にいる所を目撃されている。

バルバトスに武装を何故か道具と見なされカウンターを受けた。

バルバトスに敗北してからはキレた時に瞳のハイライトが自然と消えるようになり、怖さが増した。

バルバトスがIS学園でボコした一人目の人物

症候群発症者。

【鳳 鈴音】

バルバトスに対する感情：恐怖

中国の代表候補生

一夏のセカンド幼馴染み
勿論一夏の事が好き。

しかし一夏、箒、セシリア、シャルル、は一組なのに何故か鈴だけ二組である。

ツンデレ、だが本気でキレるとISを部分展開ではなく全展開して攻撃する。

セシリアとはいがみ合う事も多いが結構息がっている。

バルバトスがIS学園でボコした四人目の人物。

症候群発症者。

【シャルロット・デュノア】

バルバトスに対する感情：セシリア& amp; 鈴より1ランク上の
恐怖

フランスの代表候補生。
僕っ娘。

元は男としてIS学園に入ったが後に女子として再入学した。

やはり一夏が好き。

バルバトスに転入初日から殺されかけた。

その事からバルバトスが苦手。

バルバトスに強制的に特訓に参加させられると、まず泣く。

バルバトスがボコした人物……もはや何人目か分からない。

書かれてはいないが症候群発症者。

【ラウラ・ボーデヴィツヒ】

バルバトスに対する感情：憎み恨み妬み殺意 尊敬

ドイツの代表候補生。

千冬にドイツに戻ってもらうためにIS学園に来た。

しかし、千冬がバルバトスがこの学園にいるから離れたくない発言によりバルバトスを憎みだした。

が、バルバトスに敗北してからはどう言うわけかバルバトスの強さに魅せられ、バルバトスの弟子（自称）になる。

最近は殆どバルバトスと一緒にいる。

当初は一夏に敵意を持っていたがバルバトスに移り、一夏に対して別に何とも思わなくなった。

今は友人として普通につきあっている。

症候群が発症しなかった人物。

【布仏 本音】

バルバトスに対しての感情：すごくてつよーいお友達

通称のほほんさん。

いつものほほんとしている癒し系。

千冬に続いてバルバトスを全然恐れなかった人物。

バルバトスと同室。

症候群が発症しなかった人物。

【織斑 千冬】

バルバトスに対しての感情：？？？

一夏の姉。

今のところ、バルバトスと唯一渡り合える人物。

バルバトスと昔からの知り合いであるらしいが、何があったのかは話さない。

唯一分かる事はバルバトスが結構前からこの世界に存在すると言っ事と最強とされる千冬が敗北したという事。

第16話 臨海学校編 やつと……（前書き）

今回も超短いバージョンです。

何か唐突に変な眠気に襲われた……

第16話 臨海学校編 やつと……

「海っ！ 海が見えたよ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

「おー、海何てくるの久しぶりだよなあ」

窓の外を見ながら一夏が呟く。

「一夏さん」

一夏に声がかかる。

「ん？ 何だセシリア？」

声の主はセシリアだった。

「も、もしよろしければ海についた後、私と……」

ドスッ

「うっ！！」

セシリアの横腹に肘が入り、短い悲鳴を上げ、うずくまった。

「ズルいよ、セシリア。一人で抜け駆けなんて！」

「じゃ、シャルロットさん……？」

ひ、肘……強すぎです……わ……」

ドサッ

「……………あれ？」

「ちょ、セシリア！？ 大丈夫！？」

倒れたセシリアを慌てて抱き上げるシャルル。

「どっだけ力強い肘打ちを食らわせたのだろうか……」

「え、えーと、大丈夫か？」

一夏が何ともいえない表情で聞く。

「う、うん！ 大丈夫！ 大丈夫だよ！」

「そ、そうか」

「まあ、ある意味何時も通りの光景かもしれない。」

・
・
・

「ねえねえ、バルバル」

「バルバルって泳げるの？」

「のほほんさんがバルバトスに聞く。」

「もう本当に普通の友達と会話するノリである。」

「当然だ」

短いながらもちゃんと答えるバルバトス。

しかし、バルバトスの場合、平然と海の上を走り出しそうで怖い。

「ふ、せんせい師匠が泳げない訳がないだろう？」

ラウラが（何故か）得意げに言う。

「それもそっか〜」

にへ〜と笑うのほほんさん。

そして、バルバトスと平然と話す二人を見て

（やっぱり凄い！ のほほんさん凄いよ！（ヒソヒソ

（ポーデヴィツヒさんもある意味凄いよ！）

（やっぱり、私のほほんさんの弟子になるよ！！）

と、女子達がヒソヒソとはなしていた。

クラスの女子の、のほほんさん尊敬度up

と、そんな事もありながらバスは目的地へと走って行く。

第17話 臨海学校編 モーゼ？ まだまだ。

ほどなくしてバスは目的地の旅館に到着した。

四台のバスからIS学園の1年生達が出て来る。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『『『』よろしくお願いしまーす』』』

千冬の言葉の後、全員で旅館の女将さん達に挨拶をする。

「はい、こちらこそ。」

今年の一年生も元気があってよろしいですね。

ではお部屋へどうぞ」

と部屋へと案内されていく。

「やっぱり、女将さんでもアレを見たらヒクついてたわねー」

鈴が言う。

アレと言うのは勿論、みんなのグミ嫌い英雄バルバトスである

るのだ。

正直見ない方がおかしい。

「なあ、コレって……」

一夏が口を開き何かを言おうとする

「知らん。私に聞くな。関係ない。」

しかし、一夏が何かを言い切る前に拒否る箒。

よほどこのウサ耳と関わり合いたくないようだ。

箒が嫌悪するウサ耳……

何だ、新種のピクオンだろうか。

「えーと、抜くぞ？」

「好きにしろ、私には関係ない」

そう言っつて箒はスタスタと歩いて言った。

「……………俺も行こうかな

出来れば抜きたくないんだけど……………」

一夏がそう呟いた時

「ぶるあ……………」

バルバトスがウサ耳の前に佇んでいた。

「うおわ！？ いつの間に……！？」

驚く一夏を気にする事なく、バルバトスはディアボリックファンゲを振り上げ

「ぬん！！」

ウサ耳へ振り下ろした。

ドゴォ！！

小さなクレーターが出来る。

ウサ耳は見事に潰れている、が、コレと言って特に何か埋まっているモノはなかった。

「ちっ」

(舌打ち！？ ウサ耳じゃないナニカが潰れてた方がよかったのか……？)

バルバトスは顔をひくつかせる一夏を尻目に海の方へと歩いていった。

「な、何をしていますの？」

バルバトスと入れ替わるように怪訝な表情のセシリアがやって来る。

「ウサ耳が潰れた」

「は、はい？」

「夏の変な説明にちょっと困惑気味のセシリアだった。」

第18話 臨海学校編 え？ モーゼ？ うん、モーゼ、狂神バルバモーゼ（前

やっと、モーゼできたよ……

第18話 臨海学校編 え？ モーゼ？ うん、モーゼ、狂神バルバモーゼ

バルバトスがウサ耳を潰し、去って行った後、人參が飛来して中からウサギ星人が現れたとさ
めでたしめでたし

「適当だなっ!?!」

一夏が電波にツッコむ。

一夏もとうとう電波を受信できるようになったか……

とまあ、それはいいとして、一夏達は今海にいる。

ビーチにはすでに多くの女子生徒が溢れている。

肌を焼いている子もいればビーチバレーをしている子、さっそく泳いでいる子など様々だ。

何というパラダイス。

しかしまあ、一夏は目のやり場に困るなあとは思っていないし、バルバトスに至っては水平線をじっと見ている。

ちなみにバルバトスの水着は………赤いフンドシ。

何かもう言葉に出来ない。

バルバトスの一撃により海がかなり遠くまで割れた。

まるでモーゼである。

完全に力技だが。

「うわー、すごい！」

そう言いながらのほんさんが割れた海の道に入ってみる。

「すごい、すごい！」

私、海の底初めて歩いたよー」

のほんさんがはしゃぐ、が、彼女の両隣は海の壁である。

何かすごく長いこと割れてるからいいものの結構危険である。

「ちよっ！？ 本音！ 危ないから帰ってきなさい！」

「えー、もうちよっといたかったのにー」

のほんさんが不満げな表情で戻った時、タイミングを見計らったように海が閉じていった。

「流石です！ 師匠！！」

海割りをみていたラウラが尊敬の眼差しをバルバトスへ向ける。

「ラウラの言う通りだ、やはり流石だな、ゲーティア」

千冬もラウラの言葉に頷きながらやってくる。

ちなみに千冬はそこらの男なら一発で悩殺してしまうような水着を来ている。

一夏が選びました。

さらに言うと、ラウラはスク水である。

水着は学校指定のがあるからと買わなかったのだった。

胸の所に『1ねん1くみ

らうら・ぼーでうゝいっひ』と書かれている。

何故平仮名。

「どれ、私もやってみるか」

千冬がそう言い、剣を取り出す。

「え？ 千冬姉……
まさか……」

一夏の口がひくついている。

「ハッ！！」

千冬が剣を振るう。

ズシヤアアアアア！！

雷十太の飛飯綱のようなモノが海を斬り裂きながら飛んでいった。

「ふむ、やはり私ではまだ割れんか」

「教官も流石です！！」

そんな事を言う二人に

「ちょ、ちょっと待ってくれ！」

一夏が割ってはいる。

「なんだ？」

「バルバトスはもう色々諦めてるけど、千冬姉の今の何だよ！？」

一夏が何か焦ったように聞く。

「何って、斬撃を飛ばしただけだが？」

さも当然のように言う千冬。

「ぞ、斬撃って……」

信じられないような顔をする一夏。

しかし、毎日のように信じられない事をしている男がすぐそこにいるというのに、自分の姉がその部類に入るのは衝撃なんだろうか……

「このくらいやろうと思えば誰でも出来る」

「いや出来ねえよ!？」

ツッコミながら一夏は思った。

俺の姉はもう完全に染まっていた……と。

第19話 臨海学校編 狂気のマッドサイエンス(ry)前書き(

かなり更新遅れた……

第19話 臨海学校編 狂気のマッドサイエンス

海でのバルバトスの明らかにメディアが黙っていないような奇跡的な海割りの後、色んな事がありました。

強いて言うならセシリアの喘ぎ声とか（ただ鈴にむちゃくちゃに日焼け止めを塗りたくられただけ）

一夏&千冬部屋からの喘ぎ声とか（ただ一夏が千冬にマッサージしてただけ）

バルバトスの雄叫びとか（何時ものこと）

しかしどれもバルバトスにとってはどうでもいいのこと（最後のは自分自身だが）なので割愛。

現在二日目。

今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。

特に専用機持ちは大変らしい。

まあ専用機を持ってないようで持っているけど使うことがほぼ皆無のバルバトスには関係のない事である。

だから今回のバルバトスは傍観だろう。

いきなり理不尽な戦闘に入るかもしれないが。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。」

専用機持ちは専用パーツのテストだ。

全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をする。

一年がズラリと並んでいるためかなりの人数である。

「専用機持ちと篠ノ之はこっちへ来い」

千冬に呼ばれ、7人が他の生徒達とは離れた場所に集合する。

勿論バルバトスもいる。

筭は何故呼ばれたのかよくわかっていないようだ

「さて、篠ノ之。

今日から専用……」

とまで千冬が言った瞬間

「ちーちゃ~~~~~ん!~!~!」

そう言いながら何かが凄い勢いで迫ってくる。

「……………束」

千冬が凄い微妙な顔をしている。

そう、迫ってくる未確認生物は『篠ノ之 束』

箒の姉でありISを作った天災さん。

「やあやあ!会いたかったよ、ちーちゃん!さあ、ハグハグしよう!
!愛を確かめ 『ガシッ』へ?」

束が猛烈な勢いで千冬に抱き付こうとした瞬間、何かに頭を掴まれる

「ぶるあああああ!~!~!」

そして投げ飛ばされた。

ドヒューーーー……………ン、キラッ

「……………な、なあ、織斑先生？」

今、束さんがバルバトスに投げ飛ばされて、星になったんだけど……」

「大丈夫だ、問題ない」

一夏の言葉をどこか妙にキリッとした顔で答える千冬。

「問題あるよっ！！」

ズドン！ と、空に消えた筈の束が砂の中から飛び出してきた。

「ちっ」

束を見たバルバトスが舌打ちをする。

「舌打ち！？ やっぱり怖いよー！」

ちーちゃん、もうこんなのと縁切ってよー！」

ダー、と涙を流す束。

こんなのになんかの呼ばわりされるバルバトスは一体……。

「な、なんだ……？」

こんな妙にヘタレてる束さんを見るのは初めてだぞ………」

「わ、私もだ」

一夏と箒が珍しいモノを見たような視線を束に送る。

「ゲーティアと縁を切る事は無理だな……」

少なくとも私から縁を切る事はない」

千冬言葉を聞き束がキツとバルバトスを睨む。

「ちーちゃんを手込めにしたからって調子に乗っちゃいけないよ！
絶対にぎゃふんと言わせてやる……！」

そして束から何かよくわからない内に宣戦布告されるバルバトス。

「じゃあね、ちーちゃん……！」

また会おう……！」

エル・プサイ・コンガリィ……！」

「コングルウだろう」

「そうとも言う……！」

フウ……ハハハハハハ……！」

お前はどこの鳳凰院（笑）だ。

何か変なハイテンションで去って行った、東。

「あの人は一体何しに来たんだ………」

「私^が知るか……！」

一夏と篤が呆然としていた……

第20話 臨海学校編 超人兔女（前書き）

久しぶりに更新。

というか初めてレビューを書かれました！

超嬉しい！

第20話 臨海学校編 超人兔女

あれから某鳳凰院よろしく高笑いしながら去って行った束は

「一番大事な事忘れてた てへぺろ（・>）」
と言いながら戻って来た。

その際、『てへぺろ（・>）』が堪に触ったのか千冬にアイアン
クローをかまされていた。

束の頭がミシメキ言っているが大丈夫なのだろうか。

「ち、ちーちゃん？

絞まっている、すぐく絞まっているよおおお！？」

ギリギリ……

千冬が絞める。

ビクンビクン！

束が痙攣する。

ぷらーん……

「動かなくなったああああ!?!?!」
一夏達が声を上げた、その時。

ザバン!!

「ひどいよ、ちーちゃん!!」

束が出てきた。

海から。

「え……? あ、あれ?」

一夏が困惑する。

無理もない、何故なら、海から出て来た束と同時に千冬にアイアンクローをかまされている束も存在しているのだ。

「ふっふっふ……」

甘いよちーちゃん!

それは残像だっ!」

束がそう言った瞬間、千冬が絞めていた束がスウ……と消えていった。

「質量を持った残像……だと?」

千冬が少し目を大きくする。

千冬に続き束もなにかおかしな存在だった。

- - - - -

千冬と遊んでいた束だったが、本来の用事を思い出し、やっと箒にISを渡す事が出来た。

箒の専用機【紅椿】

全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISらしい。

そして、それを聞いたバルバトスの目が鷹が獲物を捉えたような獰猛なモノになり「ほう……」と言っていた。

箒は犠牲になったのだ……

「さあ、箒ちゃん！

そのISで諸悪の根源をやっつけて!!」

と、唐突に束がバルバトスを指差しながらそんな事を言った。

「え」

いきなり過ぎて篝の思考が追いついていない。

「大丈夫！束さん特製のその紅椿ならきつと大丈夫だよ！」

そんな篝を気にする事もなくはやし立てる束。

「さあ、勇者よ！ 魔王を倒し、姫を救「やかましい！」 おおう！
？」

見かねた千冬に蹴り飛ばされる束。

ズシャア！！と顔面から砂浜を滑る束、しかしすぐに復活して戻ってくる。

コイツは一体何者だ。

「あーあ……」

あんな事言ったら……」

と、一連の流れを傍観していた鈴が呟く。

「篝さん、トラウマにならなければいいんですけど……」

その呟きを聞いたセシリアが心配そうに篝を見る。

「ぶうるああ……」

そう、二人の心配の原因、バルバトスである。

束の言葉を聞いた辺りからバルバトスから徐々に闘気が漏れ出して
いた。

完全にや（殺）る気である。

「おお！！師匠がやる気だ！
頑張ってください！」

ラウラがバルバトスを応援する。

それに応えるかのようにバルバトスはディアボリックフアングを出
現させ、構えた。

それから数分後。

バルバトスの雄叫びが轟き、箒は症候群を発症した。

敢えてもう一度言おう、箒は犠牲になったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8839u/>

IS学園に来た最狂の男

2011年9月8日23時15分発行